

丹長

ひとうど

齊藤

讓

33

行政は、文書で始まり文書で終るといわれるよう、毎日役場の中を飛び交う文書も相当の数にのぼる。

私は、社会に出てから二十余年此の方、活字や数字を追い求めて生きてきた。今も変わることなく、書類との格闘を続ける毎日であるが、時には活字の無い世界へ行つてみたいと思うことさえある。これらの中書も、時代と共に様変わりをし、かつてはガリ版刷りが主流であったものが、やがてタイプ印刷となり、これも数年前からすっかり姿を消して、今ではワープロ印刷が全盛となつてゐる。

ワープロの活字は、ガリ版やタイプに比べて、格段にきれいで、読み易く、また仕上つた文書の体裁もない。

しかし、私には何故か個性に欠け味気なく感じられて仕

かれた文書をみると、妙に親しみを感じるのであるが、特に、今ではすっかり見ることが少なくなった毛筆の手紙を時折いただいたりすると、なまらなく懐しい気がして、「一字一句、筆の運びまで、なめるようにして読み、相手の人柄を偲んだりする。筆字の持つ特有の温かさや個性の滲みが、定型化された活字社会の中では、一服の清涼剤のように心に沁み透けてくるのである。町が物事を決定する時は、問題の軽重を問わず、必ず担当の職員がその案を起こし、上司の決裁を得ることになる。この担当職員が起こす伺い文書を起案文書というのであるが、最近の若い職員は、先輩達と比べ総じて文字が下手である

帳を求めることがある。上司は墨痕鮮やかに堂々と署名をし、続いて私の番となり、腋の下からは冷汗が流れ、手は振るえ、ミミズのぬたくつたような文字を書いてしまい、まさに死ぬほどの恥ずかしめを受けたことがある。その時以来筆恐怖症となり、結婚式やパーティーなどの受付での記帳は、たまらなく苦痛で、その度にあの出雲大社の悪夢を思い出し、未だあの時と同じようなみすぼらしい字で仕方なく署名をしているような次第である。我ながら哀れである。ところで、今年は白浜・東陽の各小学校が、創立百周年を迎える、既に白浜小学校は六月にその祝賀の式典を盛大に行つた。その際、沼田県知事の揮毫により、和

としても校則の「力いつぱい」を私に書けというのである。固辞に固辞を重ねたが、とうとう引受けてしまった。その日から苦しみが始まり毎晩毎晩、冷房の消えた町長室で、汗まみれになつて書いた。しかし、悲しいかな所詮は付け焼き刃であり、衆目に耐えられるものは、とうとう書けなかつた。恥をかいたようなものである。先生が碑の前で生徒に向つて、「皆さんここに書かれているように、力いつぱい勉強しましよう。でも、お習字をおろそかにすると、将来こんな下手な字を書くことになりますよ」といつていふ姿が目に浮ぶようである。来る十月二十一日の除幕式は、私にとつてつらく、切ないものとなりそうだ。

男長

ひとつごと

齊 藤

譲

(33)

行政は、文書で始まり文書で終るといわれるよう、毎日役場の中を飛び交う文書も相当の数にのぼる。

私は、社会に出てから二十余年此の方、活字や数字を追い求めて生きてきた。今も変わることなく、書類との格闘を続ける毎日であるが、時には活字の無い世界へ行つてみたいと思うことさえある。これらの文書も、時代と共に様変わりをし、かつてはガリ版刷りが主流であつたものが、やがてタイプ印刷となり、これも数年前からすっかり姿を消して、今ではワープロ印刷が全盛となつていて。

ワープロの活字は、ガリ版やタイプに比べて、格段にきれいで、読み易く、また仕上に欠け味気なく感じられて仕

方がない。だから、直筆で書かれた文書をみると、妙に親しみを感じるのであるが、特に、今ではすっかり見ることが少なくなった毛筆の手紙を時折いたいたりすると、たまらなく懐しい気

がして、一字一句、筆の運びまで、なめるようにして読み、相手の人柄を偲んだりする。筆字の持つ特有の温かさや個性の滲みが、定型化された活字社会の中では、一服の清涼剤のように心に沁み透つてくるのである。町が物事を決定する時は、問題の軽重を問わず、必ず担当の職員がその案を起こし、上司の決裁を得ることになる。この担当職員が起こす伺い文書を起案文書というのであるが、最近の若い職員は、先輩達と比べ総じて文字が下手である。

私がその案を起こし、上司の決裁を得ることになる。この担当職員が起こす伺い文書を起案文書といふのであるが、私の悪筆も父親共々にどうも父系遺伝の憂き目に逢つたようである。幸か不幸か、心臓の強いのも、一緒にいただい

力 い つ ぱ

彼等が書いたこれらの文書は、後々まで残る公文書である。たとえ文章の内容が立派であつても、あまり下手で乱暴な文字で書かれていたとすれば、公文書としての信頼や威儀を欠くことになる。私は、當日頃若い職員に「魂を入れてしっかりととした文字を書け」と口うるさく注意している。すると、口にこそは出さないが、「そういう町長はどうですか」という職員の反論が、顔

に現われる。それが、痛いところである。実は、かく言う私も子供の頃から母親に、お前の字はいじけていると言われ続けてきた生来の悪筆である。私の祖父も下手な筆字を書いては、お前らにはこうは書けまいと嘯いていたよ

く母が笑つて語るのであるが、私の悪筆も父親共々にどうも父系遺伝の憂き目に逢つたようである。幸か不幸か、心臓の強いのも、一緒にいただい

たようでもある。ペン字も満足には書けない私であるから、まして筆字となれば言うまでもない。二十年以上も前の話しがあるが、当時職場の上司と山陰地方に出張し、出雲大社を参拝した時に、社務所で記帳を求められたことがある。上司は墨痕鮮やかに堂々と署名をし、続いて私の番となり、腋の下からは冷汗が流れ、手は振るえ、ミミズのぬたくつたような文字を書いてしまった。まさに死ぬほどの恥ずかしめを受けたことがある。その時以来筆恐怖症となり、結婚式やパーティーなどの受付での記帳は、たまらなく苦痛で、その度にあの出雲大社の悪夢を思い出し、未だあの時と同じようなみすばらしい字で仕方なく署名をしている。ような次第である。我ながら哀れである。ところで、今年は白浜・東陽の各小学校が創立百周年を迎えた。既に白浜小学校は六月にその祝賀の式典を行つた。その際、沼田県知事の揮毫により、和

い

日、大木輝夫実行委員長はじめ役員の皆さんのが来られて、何としても校則の「力いっぱい」を私に書けというのである。固辞に固辞を重ねたが、とうとう引受けてしまった。その日から苦しみが始まり毎晩毎晩、冷房の消えた町長室で、汗まみれになつて書いた。しかし、悲しいかな所詮は付け焼き刃であり、衆目に耐えられるものは、とうとう書けなかつた。恥をかいたようなものである。先生が碑の前で生徒に向つて、「皆さんここに書かれているように、力いっぱい勉強しましよう。でも、お習字をおろそかにすると、将来こんな下手な字を書くことになりますよ」といつてい来る姿が目に浮ぶようである。私はとつてつらく、切ないものとなりそうだ。